



～カムパネルラとは～  
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を含めたものです。

Vol. 31 2012 年 11 月号

- 動物生理学が絵本になると・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 黒川 修行
- うさぎに始まる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 藤田 博
- おいもほりでございバス・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 高橋 里美
- どれがいい？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 遠藤 奈保子
- 本を読むことの奥深さを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・ 熊谷 亜紗
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 藤田 博

## ■動物生理学が絵本になると・・・

黒川 修行

10 年くらい研究ばかりの生活でしたが、保健の授業を作るための講義・演習を担当するようになりました。学生が普段思っている体に関するいくつかの疑問を基に、授業をどのように展開すればいいのか、等の話をしています。

今年度の授業では「生きている」を感じさせるために、「脈拍を聞く」にはどうすればいいのか、話題を提供しました。前時に感想用紙を配り「心臓」「脈拍」「血管」「循環」などに関する疑問をできるだけ列挙することにしてみました。すると、様々な疑問が出てくるのですが、その中で多かったのが「脈拍が早いと早死にするって本当ですか？」という疑問でした。

「え？そんなにこの話って浸透しているのか！？」と驚いてしまいました。この話、ちょうど 20 年前の 1992 年に初版が出た、本川達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』からきている話だろうと、すぐに分かりました。有名な本なので、読まれている方も多いのではないかと思います。時間というものが相対的なものであるということは、難しいことを考えなくても、私達は日々感じていることです（十数年間に青葉山にいた時と比較して、最近、本当に 1 日があっという間に過ぎ去っているのを実感しています。あの頃はどれだけ 1 日が長く感じたのだろう。）

それはさておき、動物のサイズが違うと機敏さが違い、寿命が違います。結果的に時間の流れる速さも違ってきます。しかし、一生の間に心臓が打つ回数は、サイズに依らずほぼ同じであることが知られています（本書の帯書きより一部引用）。本書はまさにこの動物生理学的視点からの生物学入門書と言えるかと思います。私も学生時代に演習で紹介されたのを機に購入して読みました。もう随分前の事で、内容も曖昧でした。そこで、今回の授業作りのために再度読もうと思ったのですが、本棚に見当たらず。改めて購入しましたが、なんと 63 版！びっくりしました。あ！図書館にあったかも？と、後から思い出しました。



念のため、OPAC で確認。検索されたのは、『絵ときゾウの時間とネズミの時間』（1994 年初版）。あの本が絵本に！？と驚きながらも、貸し出しされていないことを確認して、早速借用しました。ガリヴァー旅行記の「ガリヴァー」を主役にして、「サイズ」を意識させます。そして、具体的な数字を使いながら、「？」がついた発問で、「あれ？」という揺さぶりがかけられます。最初の 3 ページで、あっという間に引き込まれます。具体的な数字やグラフが多数出てきます。そして、読み切った時には満足感でいっぱい。科学的知見が満載の絵本になっています。生物「学」の入門書とも言える『ゾウの時間 ネズミの時間』も絵本になるとこのような形になるのか、と驚きました。医学的分野や生物学的な知見を子どもたちに伝えることが多くなる、保健の授業を作る上での参考書にもなりそうです。

そういえば、「脈拍が早いと早死にするって本当ですか？」の答えは？是非『絵ときゾウの時間とネズミの時間』と『ゾウの時間 ネズミの時間』を読んで考えてみて下さい。

※「絵ときゾウの時間とネズミの時間」／本川達雄文／あべ弘士絵／福音館書店

（保健体育講座）

## ■うさぎに始まる

藤田 博

「こんやは はるの おまつりだ」、そう言って山盛りのにんじんを食べるうさぎたち、そこへ一匹のうさぎがやってきます。「ながい みみ、ながい ひげ、あかい めを した おおきな しろうさぎ」です。うさぎは、身勝手極まりない決まりを押し付けます。「この ものさしより ちいさい ものは、むらを でていってもらおうか。」夏になると、「ひげの みじかい うさぎには、むらを でていってもらおうか」と言い、秋風が吹き始めると、「むらに のこれるのは、しろうさぎだけ。」と言い、冬の初めには、「むらに すんでいいのは、おおきくて、ひげが ながくて、けが まっしろで、めが まっかな ものだけに する」と言ったのです。村からは誰もいなくなります。そこへ大きなうさぎがやってきます。「ながい みみ、ながい ひげ、あかい めを した まっしろな うさぎ」、うさぎが押し付けたすべての条件を満たしています。大きなうさぎは「いきなり ペロりと しろうさぎを たべて、さっさと むらを でていった」のです。初めから見えていたそれに気付かなかったのは、驕りのため。巡り来る季節は元へと戻ることを示しています。帰ってきたうさぎたちの「ごちそうは にんじんの はっぱしか なかった」ものの、文句を言うものはいませんでした。「はるは そこまで きてるから」です。白いうさぎがやって来るに始まり、大きなうさぎがやって来るで終わる、エリック・バテュ作・もきかずこ訳『しろいうさぎがやってきて』（フレーベル館）の世界です。



レオ＝レオニ作・谷川俊太郎訳『うさぎたちのにわ』（好学社）に描き出されるのは、「せかいいいちうつくしい にわ」に暮らす二匹のうさぎ。ここからイメージされるのが「楽園」なのは言うまでもありません。年寄りうさぎには経験があり、知識があります。「りんごに てだしは しないこと」と注意するのはそのため。りんごの木の幹からにんじんがのぞいています。実はへびの尻尾です。食べようとしたうさぎにへびが言います、「りんごの きには みごとな りんごが いっぱい なってるって いうのに！」そして、りんごを差し出し、「さあ あそぼうよ！」と声をかけます。そこへ大きな赤いきつねが。

つかまってしまうと思ったその時、「おおきな くちを あけて」へびが二匹を待っていたのです。いよいよ、やはりとの思いに駆られます。しかし、それは思い違いだったのです。へびと遊ぶ、「りんごを たべても へっちゃら」のうさぎを見た年寄りうさぎは、自分の目が信じられません。「りんごってのは たぶん おおきな まるい ひかった にんじんに すぎないんだ」、そう言って、「りんごを まるごと のみこんだ」のです。のみ込んだのは、あまりに大きく変わってしまった「りんご」の意味、それを自らに納得させるものに思えます。新しい世界が、二匹のうさぎとともに始まったのです。

ささきたづ文・みよしせきや絵『子うさぎましろのお話』（ポプラ社）の舞台はクリスマス。サンタ＝クロースのおじいさんが、贈り物を配っていきます。白うさぎの子「ましろ」は、「いちばんさきに、もらいました。」「どの子どもも 一かいきり」、それがわかりながら、「もういちど たのんで、おくりものを もらおうかな」と考えます。そのためには「べつの うさぎの子に なれば いい。」ましろは、墨を体にこすりつけて黒いましろになります。おじいさんには、それが「ましろ」だということが、すぐわかりました。おじいさんは残っていたサンドイッチを食べさせてくれ、一粒の種をくれます。家に帰ろうとしたましろは、白へと戻れなくなっていることに気づきます。「もういちど もらいに いったから」、そう考えたましろは、「この たね、かみさまに おかえししておこう。」と土の中へ埋めます。すると、「あっ！ とれてる！ 白く なってる！」神さまにお返しした種が、春になって芽を出し、大きくなります。「ぼくの まいた もみの木に、おもちゃが なってるよ。それから、ベルも、えほんも おかしも。」ベルの鳴る音を聞きつけて、「いちばんはじめに、サンタ＝クロースの おじいさんのところへ、おてつだいに とんでくる」のは、決まてましろです。「いちばんさきに」と「いちばんはじめに」、相手の先を行き騙そうとする「いちばんさきに」、よく見え、よく気がつく、それ故の「いちばんはじめに」、双方ともがましろなのです。



※「しろいうさぎがやってきて」エリック・バテュ作／もきかずこ訳／フレーベル館

※「うさぎたちのにわ」レオ＝レオニ作／谷川俊太郎訳／好学社

※「子うさぎましろのお話」ささきたづ文／みよしせきや絵／ポプラ社

（英語教育講座）

## ■おいもほりでございバス

高橋 里美

「きょうは どこに いくの？」ねずみたちが尋ねると、「ふふふ。おいもほりでございバス！」このフレーズを聞いただけで、何か楽しいことが起こりそうな予感。早速、ねずみたちを乗せたバスはお芋掘りへ出発！

でこぼこ道をびよんぴよんはねながら着いた先は、たくさんのお芋が植えてある畑でした。しかし、掘ったお芋は小さい物ばかり、ねずみたちはがっかりで、「そっちのが おおきいなあ。それ ちょうだい」「やだやだ」とケンカが始まってしまいます。そんな時、大きな葉っぱを発見！ ケンカなんかすっかり忘れて、みんなで掘ってみることにしました。ところが、ねずみたちの持っていたスコップでは掘り出せません。そこで、みんなでバスのおしりを「つんつん」すると、何とバスの鼻がドリルのようにとんがって…



「大きいお芋を掘りたい！」というねずみたちの願いに共感して、ねずみと一緒にバスを応援したくなる絵本です。年長の子どもたちが「こんな大きなお芋あるの？」と言いながらも、「フレー。フレー。いもほりバス！」と応援したのは言うまでもありません。

※いもほりバス／藤本ともひこ作／鈴木出版

## ■どれがいい？

遠藤 奈保子

子どもの頃から本が好きで、時間がある時はよく本屋に行きます。幼稚園に勤めるようになり、ほぼ毎日絵本を読んでいるので、本屋に行くと絵本コーナーに立ち寄ることが多くなりました。そこで面白い絵本を探しては、子どもたちに読んであげようと、ついつい購入しています。この間、本屋で手にした絵本が『ねえ、どれが いい？』。小学校に勤めていたころ、先輩の先生に教えていただいた本でした。当時、担任していた3年生に読んであげると、みんな「キャー!!」…それは、とんでもない選択の繰り返しなのです。



「もしもだよ、きみんちの まわりが かわるとしたら、大雪と、大水と、ジャングルと、ねえ、どれが いい？」

「ジャムだらけになるのとさ、水を かけられるのと 犬に 引っぱられて ドロンコになるのとさ、どれが いい？」

「ねえ、どれが いい？へびに まかれるのと、わにに 食べられるのと、魚に のまれるのと、さいに つぶされるのとさ。」

…「えー!!」「どれもやだー!!」「…ジャングル??」「えっ、いいの!?!」「やっぱり、やだー!!」

今年の年長さんはどんな言葉を返してくれるのかな…と、考えながら立ち読み。そしてもちろん、お買い上げ。こうして、また1冊新たな絵本が増えて家の本棚はぎゅうぎゅうになっていくけれど、「ねえ、どれがいい？」と、子どもたちに読んであげる楽しみには勝てないのです。

※ねえ、どれが いい？／ジョン・バーニンガム作／まつかわまゆみ訳／評論社

(附属幼稚園教諭)

## ■本を読むことの奥深さを教えてくれるこの一冊

岸田純一作・梅田俊作絵『大草原のとしょかんバス』（岩崎書店）

熊谷 亜紗



「きょうは ポカポカいい天気。」「ぼく」が草原を歩いていると、大きなバスが横に止まりました。「おい、ぼうず」と声をかけてきたおじさんは、「こんな日は 学校さぼりたいのは わかるがな。でも、学校は ちゃんと行かなきゃダメだぞ。よし、おっちゃんが おくって行ってやる」と、「ぼく」をむりやりバスへと引っぱり込みました。バスの中は本ばかり、不思議に思った「ぼく」はおじさんに尋ねます。「としょかんバスを 知らんのか」「このバスはな、としょかんに こられない人に 本をとどけてまわるんだ。そうだ。きょう一日 しごとをてつだえ。これも りっぱな ベンきょうだ」そうして「ぼく」は、おじさんの「としょかんバス」での仕事を一日だけ手伝うことになりました。

「おっちゃん、人に本かして よませて、それで どうするわけ？」「あんな、ぼうず。『注意一秒、本一生』っていうだろう。本のなかにはな、人の生きかたを かえてしまうほどの ふしぎな力をもっているもんもあるんだ」「と、いいたいところだが、そんな本はめったにない。だいいち 本よんだくらいで コロコロ生きかたが かわったら、いそがしくて たまったもんじゃないべさ」「ぼく」は、いい加減ではあるけれど面白いおじさんと一緒に、牧場や保育園、小学校、民家、収穫祭など、さまざまな場所を訪れます。おじさんの仕事の手伝いを通して、「ぼく」は人々が「としょかんバス」を楽しみに待っていることに気づいていきます。

私はこの本に出会って初めて、「移動図書館」の存在を知りました。「移動図書館」とは、図書館を利用しにくい地域の人々のために、書籍などの資料と職員を乗せた自動車や船などで各地を巡回して、図書館のサービスを提供する仕組みのことです。「移動図書館」の存在から、本や図書館が人々にどれだけ必要とされているのか、どれだけ親しまれているのかが分かります。おじさんの言うように、本には人を惹きつけ、人の考え方も変えてしまう「ふしぎな力」があると思われます。だからこそ、人々は「としょかんバス」を待ち、まだ知らない本との出会いを望むのではないのでしょうか。この『大草原のとしょかんバス』の最後には、読者を驚かせる終わりが待っています。本を読むことの面白さや奥深さを感じさせてくれる一冊です。

（健康・運動障害教育コース4年）

## ■ 新刊紹介

エリザベス・ローズ文／ジェラルド・ローズ絵／

ふしみみさを訳『川のぼうけん』（岩波書店）

「たかい山の てっぺんで、あめが ふっています。」その雨粒が集まって小さな流れとなり、川となり、川は水量を増し、幅を増し、とうとうと流れ、海へと注ぐ、希望に溢れた冒険の物語です。「ぼく、おおきな川に なりたいんだ。」「うみを みにいくんだよ。」からもそれがわかります。まちがいなく冒険の物語でありながら、翳りのようなものが感じられるとすれば、それはどこからくるものなのでしょう。

「やがて いわのうえを ちょろちょろ はしる、ちいさな ながれになりました。」弧を描いて、上空をタカが飛んでいます。「タカさん、いっしょに うみに いこうよ」と誘うものの、飛び去ってしまいます。「ながれは やがて 小川になりました。小川は だんだん おおきくなっていくのが、うれしくて たまりません。」マスに声をかけます。「ねえ いっしょに うみを みにいこうよ。」マスがついてくることはありません。「小川は 石のうえを すべり、いわに ぶつかりながら、げんきよく くだっていきます。」岸辺の鳥たちに歌いかけます。鳥たちからの返事はありません。のんびりひなたぼっこをした川は、自分が弱っているのに気づきます。「ゆっくりと いわのあいだに しみこんでいきました。」

「川は みるみる いきおいをまして ふくれあがりました。」嵐がやってきたのです。水辺に棲むネズミが、必死に枝にしがみつき、ふるえ上がっています。動物たちは、ごうごうと音を立てて流れる川をおびえながら見つめています。「とうとう おおきな川に なったよ」、誇らしげにそうつぶやく川の声に、否定の意味合いが感じ取れるとしたら、それはどうしてなのでしょう。

町へとやってきました。「あおく すんでいた水は にごり、とおりすぎる ふねから もれた あぶらが、かわもに にじいの しみを つくっていきます。」「ついに うみに ついたんだ！」大きな川はうれしそうに歌いながら、海へと流れ込んでいきます。「ああ、うみは なんて おおきいのでしょうか！」

「そのころ 山のてっぺんでは、ふたたび あめが ふりはじめていました…」その雨粒がまた小さな流れとなり、川となり、海をめざします。その冒険の旅に希望はあるのでしょうか。

（藤田 博）

（発行：宮城教育大学附属図書館）